

文化運搬者としての新渡戸稲造

——2つの『武士道』——

照 井 悦 幸

新渡戸稲造が日本文化紹介の先駆けとして優れて讃えられるのは、日本文化を「発信した」ということにもまして、受けて側に異質な思想を「受容させた」という点に目を向けた時である。受け手側の文化に組み込ませるまでには至らなかったが、少なくとも新渡戸が呈示したものは、異質文化社会の入り口を通過して、他文化の人々の反響を呼び起こした。

明治になって30年程度が過ぎた当時、受けて側であったアメリカ人の大多数は、東アジアの異質な文化との接触経験はまれであった。通常の私たちは、異質で初めての事柄や考え方などを聞いた場合に、それを自分たちの世界の経験に当てはめて理解しようとする。そして一般には、その異質なものが自分たちの世界に当てはまらない、あるいは意味が通じないとすれば、そのまま置き去りにして理解への努力は拒絶されてしまう。新渡戸の『武士道』は、1900年に初版が出てから5年後には、10版を数えて西欧の数カ国で刊行されている。新渡戸は日本の思想を先駆けて発信して、また、受け入れさせることに成功したのである。

この『武士道』の成功以来、新渡戸は日本という国を世界に理解させる、すなわち受け入れさせるという仕事を担っていくことになる。折りしも日英同盟から日露戦争へという流れのなかで、アメリカをはじめとする国際社会の強い関心が日本へ向けられた時である。初版から5年が経ち、この国際状況の流れを明確に自覚する新渡戸にとって、『武士道』という著作の意味は、この間大きく変化していたと言わなければならない。彼の読者は、もはや彼の妻メリーやその周りの人々ではない。新渡戸の言葉は、日本という国を代表する言葉として聞かれている

のである。そして必然的に、この先駆者は国家的な使命を担わなくてはならない立場に置かれていくのである。

佐藤全弘の『武士道』（佐藤：2000）翻訳本版によって、初版と第10版とのあいだに、第10版が初版の増訂版だという以上の違いが見られることが明らかにされた。単なる増補や訂正ではないということである。では何が違っているのか。この論文は、文化運搬者として文化の異なったアメリカ社会に『武士道』という異文化要素の受容を可能にさせた新渡戸について考察するとともに、その序文を手がかりに、『武士道』の作成プロセスの考察から初版と第10版の異なりを論じるものである。

<1900年の新渡戸『武士道』>

『適合性(congruity)』は、外来の文化要素が受容されたときに、その異質な要素が、関連をもつことになる受け入れ側の要素との関係がうまく当てはまっていくかどうかを問題にするものである(平野：2000)。新渡戸は『武士道』初版の序文の中で以下のように述べている。

論述の全体をとおして、私はおよそ自分の論点のすべてに、ヨーロッパの歴史や文学からの並行例をあげて示そうとつとめたが、それは、並行例をあげれば、問題を外国人読者にいっそうわかりやすくする助けになろう、と思ったからである。

(佐藤：2000, pp. 29)

この「並行例」は、比較して両者を照合する手法である。新渡戸『武士道』の書かれ方の特徴

は、日本固有の武士道のことばを西洋の伝統に照合させるやり方である。これは読者に、日本の文化要素がどう西洋の文化に「適合」するのかという確認を促す効果をもたらしている。

もとより新渡戸の『武士道』が「英文」であるということは、英語話者とその文化背景とを理解して表現を選び、英語話者の論理的な思考に合致するような文と文脈を構成させた著作であるということを意味している。これを基礎的な前提としたうえで、新渡戸は、並行例による適合作業で、「西洋の人にとって」じっくりいく意味 (make sense) を創りあげていったということである。

また『武士道』には「孝」についての章が付け加えられなかったが、その理由を説明する第10版の序文には、新渡戸が『武士道』をどのような方法で作成していったのか、その基本的な部分が明確に表現されている。

孝について一章を私が書きにくかった理由は、孝にたいする私たち自身の態度を私が知らないからというより、むしろ、とくにこの徳にたいする西洋人の感じ方を私が知らないからであって、それゆえ私は、自分に得心のゆく比較をすることができないのである。—— (佐藤：2000, pp. 32-33)

「西洋人の感じ方」を理解して、それと日本の要素とを十分に納得のいく「比較をすること」によって書いていく。すなわち、実際に「孝」の章が書けなかったように、「西洋人の感じ方」の理解なしには、新渡戸は『武士道』を創りあげることができなかったということである。

新渡戸は日本のことばで表現される日本固有の概念を伝えるにあたって、「西洋人の感じ方」を問題にしている。すなわち、日本固有の武士道のことばが英語とその文化の固有な文脈の中に持ち込まれた場合に、「西洋人にとって」どういう響きをもつのかを問題として書きすすめたのである。

導入される異質な文化要素が、受容する文化のなかで調和的に適合するためには、入ってき

た異質な要素自らが変化していくか、あるいは、受け入れる側の方で、異質なものにあわせて変化していくケースが考えられる。日本と西洋の文化の力関係は、入っていく『武士道』の異文化要素を、西洋の文化要素に合わせるかたちで変革させることを強いることになる。この適合の要請に応じて、新渡戸は日本文化の固有な要素を「西洋人の感じ方」をよりどころにして、西洋文化に適合させたのである。この適合作業こそ新渡戸『武士道』を世界に受容させた手法であった。

つぎに指摘しなければならないことは、日本文化の脈略に位置する『武士道』を西洋の脈略に「適合」させる、この『武士道』作成プロセスの最大の特徴は、妻メリーとの対話（ダイアログ）を通じて行われたことである。

新渡戸は『武士道』第1版の序文で「この小著の直接の発端は、私の妻が、日本ではなぜこういった考え方や習慣が行われているのですかと、その理由をしばしば質問したからである」（佐藤：2000, pp. 27）と述べている。妻メリーの質問に答えるようにしてできあがった『武士道』は、すなわち日本人とアメリカ人との直接的な異文化接触の現場で生まれたものであり、また相互にとって意味をなして通じ合うもの、響き合えるものを見つけ出すプロセスのなかで創りあげられてきたものといえる。

「西洋人の感じ方」とは、具体的にはメリーの感じ方に他ならない。そして、クエーカーの教会を巡る人々であろう。新渡戸は、それまでも札幌時代の先生などを通じて西洋人との接触経験は数多い。しかし、アメリカ人社会での原体験は教会の人びとである。この序文の後半部で、新渡戸は「およそ宗教問題や宗教活動家にたいする私の言及が、万一軽んじているように聞こえるとしても、キリスト教そのものにたいする私の態度には、疑いをいだかれることはあるまいと信じている」（2000, pp. 29）と記し、キリスト教への信仰についてかなり込み入った説明がなされている。このことは、新渡戸が自己の意識のなかで想定された具体的な「西洋人読者」が、アメリカに来て以来、彼を受け入れた

教会をめぐる人々の「感じ方」を意識して書いたことを裏付けるのではなからうか。

「太平洋の懸け橋」になると言明していた新渡戸であるが、彼を『武士道』の執筆に動かしたのは、小さなコミュニティとの繋がり、あるいは対話を通じての「個人的な接触」に始まった親密な思いであったことは見落としてはならない。そしてこれこそが、文化を翻訳する者、文化と文化の間に立って、相互の異質な要素を交流させる「文化運搬者」の活動の原点なのである。

最晩年の1933年8月、カナダ、バンフにおける第5回太平洋会議の開会式の晩餐で述べた挨拶は以下のようなものであった。

—— 議論や討論は、むしろ重要である。しかし、違った国々の国民同士が個人的に接触することが、かくも多くの苦悩にみちた今日の世界にあって、測り知れないほどの良好な結果を生むことにはならないであろうか？—— この地球上の全世界の人々が親密に接触することにより、いつの日か、ゆっくりとではあっても、激情ではなくて理性が、自己の利益ではなくて正義が、全世界の民族と国家のための仲裁人となる日が来ることを希望するのは、過大な望みというものであろうか？

(新渡戸：1985, pp. 373)

この2ヵ月後に新渡戸はビクトリアで死去している。この挨拶は国際社会への最後のメッセージだが、「個人的な接触」、「人びとのふれあい」こそが、国際社会で活躍した新渡戸の実践的行動の原則であったといえる。『武士道』は、メリーやその周辺にいる人たちとの接触で生まれたものである。

比較して相互の「感じ方」の差異を知り、そして両者に内在している共通性のあるもの「コモン(common)なもの」を発見していくことは、異質な文化が双方で共感するための現実的な手段である。異文化の「相互理解」実践的のためのハウ・ツウである。このことを踏まえたとき

に、著作物以上に『武士道』の作成過程そのものが新渡戸の「太平洋に架ける橋」が意味したことを最も明確に表す具体例だといえる。

異文化の中でどう読まれるかを理解したうえで、これに「適合させて」書かれた新渡戸の『武士道』が、武士道をよく知っていると考え日本人から批判されるのも無理はない。もとより英文で書かれた新渡戸の『武士道』は、単に日本の固有な概念がことばの置き換えによって翻訳されたということとは異なっている。また、相手方（他者）の「感じ方」に注意を払って適合させた、この新渡戸の手法は、両者をひとつ高いレベルの普遍性で繋いだというよりは、いわばこれは、固有と固有のぶつかりあいから、両者の「共通なもの（コモンなもの）」を見つけ出すことで理解が可能なものを創りだすといったものである。

新渡戸には、異質な両文化をひとつにむすぶ普遍なものへの強力な意識はあったが、それは原動力として、異文化の「接触現場」に直接突き出される新渡戸の実践的な手法は、極めて現実主義的なものであったといえる。

<1905年の新渡戸『武士道』の読まれ方>

『武士道』の初版は1900年1月初旬フィラデルフィアで出されたが、この本への関心の高まりはそれから4年ほど後のことになる。これは、英国と同盟関係を結び、そして大国ロシアと対戦しようという小国日本へのアメリカからの好意的な関心の高まりと呼応するものである(オーシロ：1992)。『武士道』のアメリカにおける受容には、このような国際環境での日本情報の「必要性」とも合致したものであった。そして、1905年に増訂第10版がでることになる。その序文を新渡戸は以下のように記述している。

六年前、この小著の初版が出てから、この本は思いがけぬ歴史を経験し、予想以上に豊かな好評を博してきた。

日本版は九版を重ねてきた。この第十版は、全世界の英語読者に役立つように、

ニューヨークとロンドンで同時に出版される。——。（佐藤：2000, pp. 31～32）

『武士道』の初版と第10版を校合して、その増訂箇所を明記した訳本を出した佐藤(2000)によれば、この増訂版において加筆がなかったのは全17章のうち2章だけであり、初版全体の19.6%が増加している。佐藤は「——新渡戸自身が言うところでは、『主として具体例の追加に留めた』とある。しかしこれは著者の謙遜であって、新渡戸は初版本に全面的に手をいれているのである。」(佐藤：2000, pp. 6～7)と述べている。

佐藤によって1905年の第10版と初版本との違いが明確にされたが、この全面的な手直しは、やはり『具体例の追加』とだけみることはできない。特に初版から48%の加筆があった第5章には、具体例以上の何らかの意図があったといえる。以下にまず、どのような加筆があったのか、佐藤の訳本より第5章に限って整理してみることにする。

第5章「仁、惻隱の心」と題された章は、「愛、雅量、他者への情愛、同情、憐れみは、つねに至高の徳として、すなわち人間の魂のすべての性質中最高のものである」と認められてきた。とほじまる。第1版ではこの文に続いて、「慈悲は王者にその王冠よりよく似合うとか、慈悲は王笏を振るって行く支配以上であるとかをことばに表すには、——」と続くが、第10版は、この間に「それは、二重の意味において王侯の徳と考えられた——」と言う文章が挿入されている。挿入された文は初版からある「王者」、「王笏」と呼応するのだが、「王侯の徳と考えられた」が挿入されたことを受けて、このあと、大幅に加筆がなされていく。

以下にその部分的な表現を抜きだす。孔孟ともに、統治者のこの不可欠要件を定義して言った——『仁、仁とは人なり』と。」「私たちが最悪の種類の専制から救われたのは、まさに仁のおかげである。」「封建制を専制と一つと見るのは誤りである。」「専制政治と父権政治の違いは次のことにある——」、「——個人の人格は、何

らかの社会的連合に、おしつめれば『国家』に依存すると述べているが、このことは、日本人については二重に当てはまる。——」などとなる。

すなわち、新渡戸が第10版で大幅に加筆したこととは、日本の封建制とその統治者についての記述なのである。佐藤(2000, pp. 7)が指摘した点をさらに付け加えるが、封建制、封建君主と専制について述べた部分と専制政治と父権政治について述べた2箇所を、「忠義の義務」と題した第9章からこの章に移している。

封建制とその統治者の記述を大幅に挿入したあと、再び初版から記述された武士の情けや憐れみといった内容にもどる。そしてこの内容に関連したものが一箇所だけ加筆されてある。それは一の谷の戦いでの熊谷直実と若武者とのエピソードを紹介した後に加筆挿入されたものであるが、以下のような記述である。

『窮鳥ふところに入るときは獵師もこれを殺さず』という古い格言がある。とりわけキリスト教的と考えられている『赤十字』運動が、あんなにたやすく日本人のあいだにしっかりと地歩を見出した理由を説明するものは、おおかたこれである。——

(佐藤：2000, pp. 94)

結果として「仁、惻隱の心」の章は、武士の慈悲や思いやり、同情心を記述した部分と、48%の加筆のほとんどを占める封建制とその統治者の道德観の解説部分との2本立てのかたちになっているといえる。

第一版の序文において新渡戸は「——封建制と武士道とがわからなくては、現代日本の道德思想は封印された巻物だ、——」と述べ、また同様に、「武士道は日本の封建制度の道德体系(The moral system of feudal Japan)」であり、「封建制度は武士道の生みの親である」とも記述している。しかしながら、初版において封建制度あるいは専制そのもの、およびその統治者について掘り下げた章は『武士道』のなかに取り込まれていなかったのである。

新渡戸は、終章においては「武士道」という道徳体系が、武士階級という独占的な権力者によって組織された精神体系であり、いずれデモクラシーの潮流に最終的には飲み込まれる運命にあると预言する。すなわちこの専制と統治者を解説した加筆部分は、道徳体系としての「武士道」の限界を認識しつつ書かれなくてはならぬ部分であり、勢いその正当性を思惟的に論じた部分であったとはいえないだろうか。そういった意味で、(日本の君子は専制主義ではなく、天から家来を預かる父権政治であるといった解説を与えているが)この部分の加筆を得た10版は、単なる補完の役割以上に、おのずと初版の『武士道』に比べて愛国的な著作に変わっているといえるのではなかろうか。

<結語；1900年以後の新渡戸の変化>

新渡戸稲造の英文『武士道』は、日本の文化を西洋に紹介した先駆的な著作であるとされる。英文『BUSHIDO』は、表紙に副題として『THE SOUL OF JAPAN (日本の魂)』と付けられ、その下には『AN EXPOSITION OF JAPANESE THOUGHT (日本思想の解明)』と記されている。この表紙をみるかぎり、確かに大きく西洋に向けて日本の思想を紹介しようという意図で書かれたように感じられる。

しかし、1900年にはじめて刊行された初版の序文を見ると、この『武士道』は、もう少し身近なところに執筆の意図があったことは明白である。新渡戸は以下のように記述している。

長わずらいをして、やむなく無為の日をおくるほかないのを利用して、私は、家庭内での会話で返した答えのいくぶんかを、今皆さんにお示ししている順序で書き下ろした。—— (佐藤：2000, pp. 28)

妻との些細でプライベートなダイアログがきっかけとなって、またあの10年まえのド・ラプレーとの個人的な会話に触発されて『武士道』は、まずこの2人、そして彼の周辺の人々に向

けられて書かれた。その新渡戸の『武士道』が、「ナショナル」を強く意識して、それを取り囲むインターナショナルを広く相手にするようになっていく。

初刊から5年後の1905年、『武士道』は第10版を数えた。「六年前、この小著の初版が出てから、この本は思いがけぬ歴史を経験し——」と書き出した第10版の序文には、以下のような記述がなされている。

自分の小著が広い範囲をおのおの別々の世界で、同情ある読者を見出してきたことを感じて、私は喜びにたえない。そのことは、小著の主題が広く世界全体にとって興味あるものだったことを示す。

(佐藤：2000, pp. 32)

これに続けて、米大統領ルーズベルトがこの本を読んで友人に何冊も配ったことを知らされ、ことのほか嬉しかったと書かれている。

明らかに初版の頃とは違って、『武士道』の読者が文字通り国際的に拡大されている。これと同時に新渡戸の想定する読者も世界全体に拡大していく。国際を意識するとは、すなわち自国を意識することである。1900年を境として、新渡戸の活躍の場が強く日本の中核と関わりを持ち始めるのもこの時期であった。1901年の台湾総督府技師、1902年には台湾総督府糖務局長になっている。

ジョージ・オーシロ (1992) は、植民地行政官としての経験と国政を担う重要人物との関係のなかでの新渡戸の変化を示唆し、「以前は政治を論じることのなかった稲造が、今は、政治、および、国際的な諸問題についても意見を述べるようになった。しかも、その意見は学者としてのものではなく、新聞の編集者や官僚などの型にはまった見解を反映したものであった」(オーシロ：1992, pp. 93)と述べる。1904年、日露戦争での日本の勝利は国際社会の日本への関心の高まりとともに、オーシロは、『武士道』が「日本軍の勝利に論理的説明を与え」(1992: pp. 97)、著者新渡戸が日本のスポークスマンになっ

ていったことを指摘している。

第10版の「仁、惻隱の心」を解説する第5章に、大幅に専制君子にかかわる内容を挿入したことを、新渡戸は直接的には説明してはいない。ただこの第10版に関して、「具体例を増やした」と言っているのみである。

しかしながら、ひとつだけ、明白な第10版と初版のあいだの根本的な違いを指摘することができる。それはとりもなおさず、第10版が「加筆」されたものであるということである。

この「加筆」は、初版で書かれた前後の文脈に合わせて行われたものであろう。そしておそらく新渡戸ひとり、「机の上」で行われた。第10版の加筆部とは、すなわち初版のようなメリーとの直接的な対話や彼を取り巻く教会の一人ひとりの顔を浮かべることなしに書かれた部分である。このとき、細心の注意を払って創りあげた『武士道』の「適合性」は、ずれ始めたのではないか。

1905年に加筆する新渡戸の意識にある読者

は、広く国際社会の不特定多数のものであろう。そしてそのことが、ますます新渡戸のナショナル意識を高める。このとき新渡戸の『武士道』は、その固有なことばを異質なアメリカの「文化」へ適合させることなく、むしろ、現状としての日本をインターナショナルの「政治的なもの」との適合にむかわせたとはいえないであろうか。

参考文献

- ジョージ・オーシロ 『新渡戸稲造』1992, 中央大学出版部
 平野健一郎 『国際文化論』2000, 東京大学出版会
 佐藤全弘 『武士道』新渡戸稲造著 佐藤全弘訳 2000, 教文館
 新渡戸稲造 『新渡戸稲造全集, 第19巻』1985, 教文館